

3つの世紀のポール・ベニシュ

ユートピア、ライシテ、文学

2016年10月30日（日）10:00-12:00

報告者：杉本隆司（一橋大学）、伊達聖伸（上智大学・非会員）

討論者：三宅芳夫（千葉大学）

世話人・司会：片岡大右（東京大学）

『作家の聖別』（原著1973年、日本語訳は水声社より、片岡ほか訳で2015年1月に刊行）を嚆矢とするポール・ベニシュの「フランス・ロマン主義の哲学的歴史」四部作は、今日、フランス文学研究の必須の古典とみなされているのみならず、社会思想史上の重要文献としても大いに参照されている。じっさい、カトリック教会を引き継ぐ「新たな精神的権力」の両義的な台頭を論じる彼のパノラマ的な19世紀研究は、作家の、詩人の、あるいは「文学的なもの」の社会的身分規定の変遷を跡づけるというその中心的な企図を遂行する途上において、世紀前半における種々の「教説」の隆盛に丹念に付き合い、今日なお議論の土台として役立つ見事な思想史的再構成を提出している。こうした文脈の中でわけても頻繁に引かれるのが、第2巻に当たる『預言者の時代』である。本セッションは、現在翻訳刊行準備中（片岡・杉本ほか訳、水声社）の本書を中心に、ベニシュの仕事の射程を改めて測定するとともに、そこから浮かび上がってくる諸問題をさまざまに問いなおすべく企画された。

1908年に仏領アルジェリアのユダヤ人家庭に生まれ、2001年にパリで死んだ彼の生涯は、20世紀のほぼ全体と重なり合う。1920年代末には「シュルレアリスム第2宣言とその幻想の時代を[...]、激烈に生き」（ステンメッツ）、30年代の反スターリン主義の経験を経てやがてマルクス主義から離れることとなったベニシュの19世紀論が、著者自身の世紀の政治的冒険とその帰結を背景として書かれたものであるのは、いうまでもない。2つの世紀のあいだで構想されたこのロマン主義研究を、21世紀において読むことの豊かな意義を共有することが本セッションの目的であった。

奇しくもセッション前日の夕方、世話人・司会の片岡のもとに1冊の新刊書が届けられた。工藤庸子『評伝 スタール夫人と近代ヨーロッパ』（東京大学出版会）がそれであって、当日の導入的プレゼンテーションでは、3つの世紀との関連でベニシュを読むという実践の見事な例として、同書を取り上げることができた。何

しろ、繰り返しベニシュエの業績を参照するこの 19 世紀フランス研究は、「二〇一五年夏、安保法制反対の国会前デモ」の光景を喚起することで始まっているのである。

以下、「ユートピア」を始めとする 19 世紀フランスの社会思想の再検討を行っている杉本、日本におけるライシテ研究の第一人者であり、「ライシテに向かう動き」のなかでの文学の役割に関心を寄せている伊達による報告の内容を紹介する（レジューメに基づく片岡による要約的再構成）。

報告 1 (杉本隆司) : 『『預言者の時代』の「科学的ユートピア」批判——宗教「教義」としての社会学』

社会学史とコント

フランス社会学の系譜は、デュルケムから遡行するかたちで、まずはタルドやル・プレーへ、そしてクーランジュやエスピナスを経てコントやその師サン＝シモンへと辿られるのが定石である。教会権力と王権の地盤が揺らぎ、7 月王政以降に決定的となる社会の世俗化の中で、社会学が誕生したというわけだ。じっさいには、コントやサン＝シモンの中には「実証主義的」な思考とは別の様々なファクターが見出しうる。しかしそうしたもの——たとえば彼らの思想の宗教的次元——は学説史から捨象されるか、せいぜい逸話として扱われるにとどまってきた。こうした操作は学説史の構築には不可避であるとはいえ、そのことにより、各専門領域が誕生・分岐する以前の知的空間の現実が見えづらくなっているのはたしかだ。ともあれ、今日ではそもそも、コントやサン＝シモンの思想を扱う場は、ハード・サイエンス志向を深める社会学や経済学の領域から、哲学や文学、政治思想といったソフトな(?) 人文科学の領域へと撤退ないし拡散しているといえる。

「預言者の時代」と精神的権力の希求

この「撤退」は消極的なものではない。この時代は、実証主義に限らずキリスト教に代わる新宗教＝各種のメシアニズム運動や神秘思想、世俗宗教が出現した時代であり、それゆえベニシュエは「預言者の時代」を語るのであるが、社会学史の枠組みから自由に、このような次元を含めた当時の思想の実相に迫ることができるようになったのだから。「世俗的でありながら精神的なもの」の希求こそが、この時代の思潮を特徴づけているのだとベニシュエは説く。このような見方は、古典主義や 18 世紀啓蒙主義への反逆というロマン主義の一般的な理解を退けているばかりでなく、ロマン主義運動を主に文学や芸術、宗教の領域に係留し、その外部に(科学的) 社会(主義) 思想を位置づけたうえで両者の影響関係を精査する古典的な研究とも異質だ。そこに見て取れるのは、「宗教を批判すればするほど逆に宗教の必要性を認識し、宗教を排除すればするほどその「不在」を認めざるを得なくなる」(宇野重規) という 19 世紀のフランスが経験した一つの逆説である。ベニシュエ

はこうして、「宗教と科学のゼロ・サムゲーム」という単純な近代化論に陥らずに19世紀を理解する視点を提供しているのだといえる。

「科学的ユートピア」批判

しかしベニシュは、ロマン主義の中から精神的自由主義の思想潮流を浮き上がらせようと努めており、そのために「科学的ユートピア」思想を否定的にとらえている。ユートピア思想はドグマ（特に人類の目的を未来に設定する目的論的歴史哲学）を打ち立てるものとして退けられるのだが、そうすることでベニシュは、19世紀のドグマ思想だけでなく、20世紀の「新ドグマ」、マルクス主義をも批判している。「新しい精神的権力の魂は、思想と信教の自由にこそある。こうした自由の行使が現実的に保証されていることが、この権力の存在と社会への影響力発揮を可能にする条件である。教義とはいかなる形態のものであれ、この権力の破滅に他ならない」（『聖別』）。コントやマルクスの社会科学が科学の名に値しないことを主張するベニシュの立場は、同時代のハイエクやイッガースの全体主義批判、ポパーの歴史法則主義批判を想起させる。

ウェーバー、アロン、ベニシュ

これは社会学史でいえば、ウェーバ一流の方法論的主観主義の系譜に連なるものである。ベニシュがウェーバー社会学を参照したのかどうかはわからないが、いずれにせよ、彼の社会学説史の理解が、同世代の元ノルマリアンであるレイモン・アロン——フランスにおける初期のウェーバー紹介者——とともに、デュルケムやコントよりもウェーバーに近いものだったことはたしかだろう。19世紀末から20世紀にかけて、社会学の「目的」は特定の教義によって定められるのではなく、社会学者自身の主観に任されるようになった。しかしコントをはじめ、19世紀前半の「疑似科学的ユートピア」社会学は、フランス革命後の社会的無秩序と「社会問題」の出現に対応すべく生まれたものであって、当時社会学が解決すべき目的は明確だった。社会学者は未来の「あるべき社会」、つまり将来への精神的不安を取り除く社会の進歩を人びとに提示する、いわば近代の聖職者の役割を引き受けていた。人びとが信じるべき共通の指針や科学への信頼を失うことは、そのまま「社会」それ自体の解体に直結するものとみなされていたのだから、コントが構想した社会学は皮肉抜きで、「教義の社会学」たらざるをえなかったのである。この観点からするなら、ベニシュは、社会学の「教義」の側面とともに「社会」の側面までも削ぎ落としてしまったようにも思われるのであって、『預言者の時代』には「社会」や「社会的なもの」に対する問いが抜け落ちているという事実は、指摘しておく必要がある。このような「社会学的忘却」（市野川容孝）を克服する過程で、コントのうちに「疑似科学」を認めて済ませるのではなく、（自然科学から社会科学までを含む）「総合社会学」の発想を再解釈していくこともまた、求められるべきだろう。

報告2（伊達聖伸）：ポール・ベニシュー『預言者の時代』をめぐって ベニシューのコント評価

ベニシューは、『ライシテ、道徳、宗教学』として刊行された博士論文を構想するなかで最も影響を受けた著者の一人であり、とりわけ『預言者の時代』は熱心に読んだ。しかし、コント論はピンと来なかった。この印象はおそらく、ベニシューの著作におけるコントの位置づけに関わっている。「精神的リベラリズム」や「ユマニズム」に共感を寄せるベニシューは、「科学的主張をもったユートピア思想」に批判を集中させる。実際のところ、コントは科学的還元主義とユマニテの復権のあいだの微妙な位置にいたのであるが、ベニシューがとらえたコントは——あるいはベニシューの時代における標準的なコント像は——、科学的還元主義のほうに傾いていたように思われる。こうしてベニシューは、サン＝シモン主義に引きつけてコントをも批判する。しかし、たとえば彼のある論文中の以下のような言葉は、コントと響き合ってもおかしくないものではないか——「人間の精神は、その本性から、いつの時代も社会や歴史を越えて溢れ出し、そして先行した時代や後に来る時代の人類と合流し、その人類と交流する。」「人類」の観念をめぐってはこうして親近性が感じられるにもかかわらず、ベニシュー自身がコントに冷淡だったのは、後者が「制度」と「教義」を志向していることが大きい。システムのコント、システム嫌いのベニシューという対比ができるだろう。

宗教的なものと文学

「ロマン主義文学はすべて近代社会から生まれたが、その社会にうまく適合していない」（『幻滅の流派』）——このように述べるベニシューにとって、19世紀の文学経験は、異邦人の感覚、あるいは倦怠によって特徴づけられる。シャトーブリアンによれば、古代人はこの世の喜びを超えた喜びのことを気にならなかったのに対して、キリスト教の到来が、天上の喜びとともに地上の悲しみを説くことで、「漠然たる感情」に道を開いた。しかもやがて、神に対して人間が自律した世界を、教会に身を置くことができずに生きることを余儀なくされて、不安な魂は既存の教会にも新しい世界にも馴染むことができずに、異邦人の感覚につきまといわれるようになる。チャールズ・テイラーは『世俗化の時代』のなかで、世俗性の経験のひとつの帰結としてボードレルの憂鬱を引き合いに出す。宗教的信念と実践の衰退は、この衰退に先立つ時代の意味に満ちた感覚を知っている者に対して、回復不能の無能力を実感させずにはおかないわけである。一方ヴァレリーは、実在と不在のあわいを漂う「悟性の怪物」について語り（『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法』）、「神なき神秘家」としてのテスト氏の肖像を描き出している。世俗の時代が到来することで析出してきた新たな宗教的感覚というべきものを、近代文学はその突端において描いてきたのではないか。宗教と文学という問題系を再定位し、宗教的なものの行方との関係で文学を問いなおすこと。ベニシューの業績は、この課題への有益な示唆を与えてくれる。

「預言者」をめぐる

ベニシュエが「預言者の時代」として語る時代は、どのような時代だったのか。マルセル・ゴーシェによれば、それは他律社会が自律社会に移行した時代、すなわち他性の経験が制度的なものであることをやめてしまった時代だ。フェルナン・デュモンは 19 世紀を論じて、それは伝統の後退によって過去が「解説すべき謎」となり、それと連動して未来が「問題含みのもの」となった時代であるとする。過去も未来も他者によって安定的に定められたものではなくなったこのような時代にあつて、預言者を自認することには深い曖昧さがつきまとう。こうして「シャトーブリアンは、自らの世紀を教導すべく権限付与されているとの思いを深めるほどに、そのような彼自身の自我への強迫観念に取りつかれていった」（『預言者の時代』）。では現代はどうだろうか。このような両義的存在としてであれ、もはや預言者が求められる時代ではなくなったのか。1970 年代のトゥーレーヌは、「新しい社会運動」のうちにポスト産業社会の行方を展望する予言者の役割を認めていた。より近年では、郊外のラッパーのうちに予言者の面影が垣間見られることもある（森千香子『排除と抵抗の郊外』）。ベニシュエが見定めた預言者の時代は、1848 年以後の幻滅によって幕を下ろすが、やがてドレフュス事件とともに「知識人の時代」（ヴィノック）が訪れる。この時代もまた、サルトルの死によって終わったといいうるとして（ルノー）、では今後はどうなるのか。いかなるタイプの知識人か、いかなるタイプの預言者／予言者か。今日的な条件と類型をめぐる、考えていく必要がある。

2 つの報告ののち、討論者としてサルトル研究者の三宅が発言した。ベニシュエとサルトルは同じ時期にユルム街の高等師範学校で学んでいる（前者が 1926 年、後者が 1924 年入学）。そうしたこともあり、フランスの言論空間におけるノルマリアン の地位といったテーマから始まったコメントは、諸分野に渡る該博な知識を背景に、予定の発言時間を超えてとめどなく繰り広げられてゆき、終わり近くでは、アメリカ黒人の肌の色がそれほど黒くないのは白人男性によるレイプのために混血が進んだことによるといった歴史的知見さえもが披露されていたことを司会は記憶しているが、本セッションの主題と相当にかけ離れたこうした問題が、いかなる文脈のもとで言及されることとなったのかは、もはや思い出すことができない。ともあれ、適当な頃合でパネリスト間のやり取りと会場との質疑応答へと移行させえなかったのは、司会の不手際というほかない。

最後に残された数分間、ベニシュエにとっての 20 世紀の意味をめぐる問いかけが会場からなされ、司会が応答して、1966 年のスリジー＝ラ＝サルにおけるシュルレアリスムをめぐるシンポジウムでのエピソードを紹介した。詳細は紙幅の都合により省略するが、準備中の片岡「ポール・ベニシュエとその時代（二）」で取り上げるので、いずれ参照されたい。

（文責：片岡大右）